

THE ULiCS TIMES

2022.10.vol.12



企画展示「はじまりの一文」開催！

3月末から5月中旬にかけ、総合・国際文化学図書館の展示棚にて「はじまりの一文」という企画を行った。本の書き出しの一文目は、その本にとっての「はじめまして」の一言目と捉え、春に新たに誰かと出会うように新しい本と出合いの機会を作り出せないだろうかというコンセプトのもと、企画を立案した。展示棚には書名を伏せて本の一文のみを掲載した紙を設置し、その紙の裏には図書館内の地図が載っており、それを頼りに書架へと本を探しに行くというものだ。展示した十数種の書き出しそれぞれに好評をいただき、特に「先生、頭がおかしくなっちゃったので、今日の体育を休ませてください。」（住野よる『また、同じ夢を見ていた』より）という書き出しが注目を集めた。棚での展示方法や、書架で一文が書かれた本を見つけやすくするラベル貼付など、ULiCSメンバーに協力してもらいながらこだわった箇所も多く、支持をいただいたことをありがたく思う。



▲ 展示棚の用紙とルール説明コーナーの様子

また、企画実施中の4月中旬にはTwitterでアンケートを開催した。教科書に載っていた物語や論説の書き出しを引用し、「どの一文を覚えているか、興味を持てるか」と問いかけた。こちらには合計260票の協力をいただき、4つのアンケートで選ばれた一文は展示棚に追加した。アンケートは大きく偏りのあるものから、数パーセントの僅差となったものまで、バラエティーに富んだ結果となった。アンケートに参加していただいた方、企画を楽しんでいただいた方に、その文章を学んだ当時を懐かしんでもらえていたのなら幸いである。

また、展示された一文に加え、総合・国際文化学図書館以外に所蔵されている図書から選んだ一文も書かれた「はじまりの一文しおり」を配布した。図書館をより効率的に利用できるヒントも共に載っているので、見かけたらぜひ利用してほしい。

この場をお借りして、利用していただいた方々には感謝申し上げます。ありがとうございました。（文学部3年 伊藤）



2022年10月3日発行
神戸大学附属図書館学生チームULiCS



<https://lib.kobe-u.ac.jp/about/ulics/>



@ULiCS_KobeU_Lib



ULiCS

検索

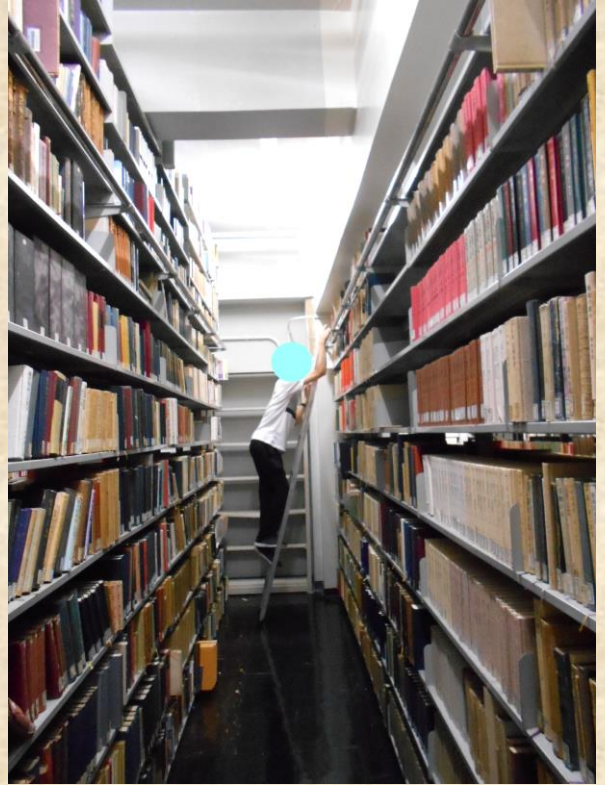
「化石本発掘イベント」を開催！

神戸大学附属図書館学生チームULiCS（以下、ULiCS）の部員は2022年7月27日、総合・国際文化学図書館で「化石本発掘イベント」を開催した。ULiCS主催の対面イベントとしては、実に5カ月ぶりとなる。企画チームは同年3月から準備を行い、参加者と共に「発掘」を楽しんだ。

「化石本発掘イベント」は書庫を用いた体験型イベントである。本の奥付に記された出版年を「化石度」と定義し、書庫から持ってきた本の「化石度」の高さを競うというものだ。参加者は、制限時間内に膨大な量の本を比較検討する必要があることから、書庫の3層と4層のみを使用した。

3層と4層には、和書が所蔵されている。入口のある4層では、言語や社会科学の和書、そして社会科学、芸術・美術の大型和書がある。3層には、総記、哲学、歴史の和書及び大型和書、各種文庫がある。

イベント当日、企画チームは朝早くから活動していた。感染予防対策、備品・流れの確認、Twitterでの実況等、手分けをして開催に備えた。9時ごろに館内放送を行い、参加者が集まったところでイベントはスタート。5分ほどでルール説明を行い、書庫の案内をした。朝の書庫はひんやりと涼しく、仄暗い。書庫の構造や所蔵書の分類が分かったところで、発掘時間となる。制限時間の15分たっぷりかけて、参加者と企画チームは本を厳選した。書庫から取っては奥付を確認し、手元のものと比較する。本の外見と「化石度」がそぐわないこともあり、なかなか難しい。どうか2冊を選ぶと、いよいよ「化石度」の判定だ。最も化石度の高かった本は、なんと明治38年のもの。発掘した参加者には、賞状と景品が贈呈された。旧字体を手掛かりに探したそうだ。



▲ 発掘作業を行うULiCSの部員



▲ 発掘を終えて記念撮影

本イベントは、当初6月10日に開催する予定だった。しかしながら、参加者の集まりが悪く、一度開催を延期する運びとなったのだ。結果的に、少ないながらも申し込みしてくださった方とイベントを楽しむことができた。延期を決定してからは、効果的な宣伝方法、日や時間帯による図書館利用者数などを再考する日々だった。企画チームだけでなく、多くの部員にとって、対面型イベントの難しさを体感する機会になったと感じる。今後のイベントや企画運営に活かしていきたい。

(国際人間科学部3年 佐藤)

2021年度(令和3年度)館長懇談会

2021年11月19日、自然科学系図書館会議室にて図書館長との懇談会を行った。

2021年度は新しく国際文化学研究科の櫻井徹教授が神戸大学附属図書館長に就任された。

ULiCSのメンバーは櫻井館長、中山情報サービス課長、笠原情報サービス課長補佐と対面し、館長への質問や図書館への要望を話した。

質疑応答

Q. 図書館長とは大学図書館全館の館長なのか？

A. そうである。ただ、ほかに副館長、分館長がいる。

Q. どのような経歴でどのような経緯で館長に就任されたのか。

A. 大学院修了後、研究の道を歩んできた。専門は法哲学で現在は移民問題を中心に、法律と人間の根本的関わりをテーマとしている。図書館長は教授から選出すると神戸大学学則で決まっており、研究科長経験者として打診が来たため引き受けた。

Q. 新型コロナの流行による図書館の利用制限について、今後はどうなるのか。

A. 来年度(2022年度)は、今年(2021年)5月から予定していた時間外開館(一律19時まで)の実施を検討している※。コロナ収束以降の開館時間について、附属図書館運営委員会で継続審議中である。各キャンパスの特性やこれまでの利用統計に鑑みて重点化する図書館を検討している。ほかには閉館後の図書受取ロッカー設置も考えている。

また、館長からメンバーに対して「ULiCSで何をしたいか、何をしたいか入部したのか」という質問があった。

この質問は意表を突くものであった。なぜなら私の入部理由は、読書や図書館について話せる団体であるという漠然としたものだったからだ。明確にしたいことがあったわけではなかった。

しかしこの質問によって、サークル活動とはメンバーがしたいことであり、メンバーが主体となって実行するものなのだという事に気づかされた。

ULiCSは上意下達なグループではないので、1回生も上回生もしたいことを提案し、決定されたことに自分たちも協力する。コロナ禍においては、サークル活動ではそういうことがますます重要であるかもしれないことを痛感した。

(工学部2年 米谷)

※2022年度は時間外開館を実施しています。
詳しくは各館の開館カレンダーをご確認ください。

神戸大学附属図書館Webサイト>学内図書館一覧
<https://lib.kobe-u.ac.jp/libraries/list/>

あなたもULiCSで活動しませんか？

ULiCSってなに？

“University Library Connects Students”のコンセプトからULiCSと命名された、神戸大学附属図書館の学生サポーターチーム。神戸大学附属図書館における「学生協働」のチームとして、2015年に結成された。

どんな活動をしているの？

月1回の定例会や読書会「まごまご読書倶楽部」を実施している。部員が自由にテーマを決めて本を展示する「うりくす文庫」も総合・国際文化学図書館展示コーナーで常時展開中。その他、本や図書館を中心として、2面のようなイベントの主催や、チーム内外との交流など様々な活動を行う。まごまご読書倶楽部や定例会はいつでも見学可能。興味があればぜひお気軽に参加してください！

まごまご読書倶楽部・定例会の開催情報はULiCSのTwitterで発信！
右のコードを読み取って@ULiCS_KobeU_Libをフォロー！



新メンバーおすすめ書評



村上春樹『ノルウェイの森』（上・下）

講談社文庫、2004年

アコースティックギターに導かれて

「俺には昔女がいた／あるいはこう言うべきか／彼女には俺がいたと／彼女は部屋を見せてくれた／ノルウェイの木って素敵でしょ？ って言って」（拙訳）。アコースティックギターの忘れられないあのイントロに導かれるこの歌に私が惹かれたのは、そのメロディーの為か、それともその奇抜なストーリー故なのか。

ビートルズの佳曲に導かれて、物語は主人公の回想として紡がれる。そこで語られるのは、「僕」「直子」「緑」という名前によって個性を付与されながらも、私達の現実と地続きであるかのような、等身大の学生生活だ。起きて、歩いて、呼吸して、悩み、愛する。69年という時代設定もまた憎い。作者の青春と重なる符号だが、私が感慨を覚えるのは単なる懐古趣味からではない。エネルギーが迸り、さまざまな豊かさがもたらされた渦の中においてこそ、時代も場所も超えた群像は鮮やかに彩られる。そう言ったところか。

アコースティックギターには秋がよく似合う。少なくとも私はそう思う。繊細で鮮やかな音色が、どこか暖かく優しい紅葉や陽だまりの色彩と調和するからなのだろう。秋読書のお供に自信をもって薦めたい一篇である。

（人文学研究科修士1年 中西）



森見登美彦『熱帯』

文芸春秋、2018年

とびっきりの不思議体験をあなたも

『熱帯』という本をめぐる、なんとも不思議な話だった。わからないからこそ面白いと言える本であると感じた。今まで私が読んできた推理小説や恋愛小説、その他の小説は、物語の中に出てきた謎を全て解き明かし、たった一つの結末にたどり着く。それゆえ、私にとって小説を買うことは物語を買って、楽しむという行為のように感じていた。しかし、今回はそう単純ではなかった。物語を買ったことには変わらないが、まだ読み切れていない、謎に囚われたままの気分である。再読せねばと思ったが、ここでふと考えた。再読してもわからないのではないかと。この小説は何もかもを語らないからこそ、わからない。とびっきり不思議なのではないか。ただ、わからないとは言っても自分なりの解釈はできる。読み手の数だけ解釈がある。読了後は、物語の中に巻き込まれたようにも感じるかもしれない。是非、この不思議をあなたにも感じてみてほしい。

（農学部1年 清水）